

SHIBUNARI!

*** シブナリ ***

「ええ、聞いていますよ〇〇くん。私が担任の茨木華扇です。よろしくお願いいたしますね？」

「あ……は、はい、よろしくお願いします、し、しま……す（凄い美人の先生だなあ……。渋成の噂が本当ならこの先生も……？）」

ここは渋成市と呼ばれる街。

そこにある幼稚園から大学に至るまで一貫の巨大な学校、渋成学園の高等部の職員室。

非常に大きく生徒数の多い学校であり、高等部の校舎も7つはあるような学校である。

そこに転校してきたのは、親が海外転勤になり、両親についていくか親戚の家にお世話になるかの二択で後者を選んだ少年の〇〇だった。

その親戚も、旦那が長期の単身赴任となり、家に母と娘の二人だけなので男がいてくれると助かる、そう言われてやってきたのだった。

そんな彼は自分の通う高等部の校舎、その職員室に来ており、担任の教師に挨拶をしていた。

笑顔を向けるその教師、茨木華扇は、〇〇の感想の通り凄まじい美人だった。

薄桃色の髪を肩のあたりまで伸ばしていて、優しそうでありつつ意思の強そうな美貌の女性。

もし、街中で見かけたら女優か何かと思う様な女性であり、また女性もののスーツを着ている胸元はパツパツになっている程に大きい。

「……………っ（凄い。何カップだろ……）」

健康的な男子である〇〇は、失礼であるとは思いながらも視線を胸元へと向けてしまい生唾を飲んでいく。

ゴクリ。と、思った以上の音を響かせて、〇〇少し焦るけれど華扇はそれにクスリと綺麗に笑うと――。

「ふふ♥ さ、教室まで案内しますのでついてきてください？」

「あ……は、はい……！」

——何を言うでもなく立ち上がって膝上の長さのスカートから健康的にムッチリした足を見せながら歩き出した。

その足にさえも〇〇は視線を向けてまた生唾を飲んでしまっていた。

華扇のスカートは教師が履くにはかなり短いように見えたけれど、〇〇は職員室を出る前に部屋の中を少し見渡せば同じような、下手したら更に短いスカートを履いた女教師が存在していて、それに目を見開きつつも華扇の後を追った。

彼が少し速足で追いつくと、華扇はこの街、この学校について説明していく。

「あなたも少しは知っているかも知れませんが、この街、渋谷は女性が多い街です。比率で言うと7対3くらいですね」

「はあ……（うわあ、歩くとおっぱいが……揺れて……凄い……）」

片手の人差し指を立てて説明する華扇。

その話を聞きながらも〇〇の視線は、歩くたびに跳ねるように揺れる大きすぎるおっぱいに釘付けになってしまっていた。

華扇は時折〇〇の方へと視線を向けて、その視線を受けて彼はおっぱいを見ていたことがバレないように視線を逸らすのが、また気になって見ててしまうことを繰り返していた。

その若い性欲に塗れた視線を楽しむ様に華扇は胸を揺らして説明していく。

「それと、この渋谷は、他の街ではありえないルールなどもあります。雰囲気や、決まり、規則なども元の学校とはかなり違うと思うので面食らわないようにしてくださいね？」

「っ！ ルール……って、なんですか？」

華扇の言葉に〇〇は敏感に反応していく。

彼の頭を過るの、華扇の美人さに面食らいながらも思い出した『渋谷の噂』の話。

ネットで実しやかに囁かれる都市伝説のような話の数々だ。

曰く——。

『渋谷には美人と美少女しかいない』

『その全員がエロくてセックス大好き』

『当たり前フェラしてくれる』

『風俗がめちゃくちゃ安くて高品質』

『男とセックスしたくて金払うJKがいる』

『学校には自由にセックスできる性処理委員がいる』

———などなどのエロ漫画そのものの噂だ。

信憑性はなく、ネタのような扱いでありつつも男の夢、ロマンとしてみんながみんな、その噂が真実であることを願っていた。

もちろん、〇〇もその噂を信じていた。というか半信半疑ではあるが男としては信じたい気持ちが強かった。

そして、この街に引っ越してきてまだ二日ほど、故に落ち着いて街を見る機会はまだなかったけれど、どこもかしこも美人だらけなのはうっすらと気づいていた。

厄介になることにした親戚、その叔母と娘自体がまず美人なのだから。

その上で、こうして会った華扇も美人であり、校門から校舎にいたるまでも美少女だらけ。

そしてスカートの短い女子や、胸の谷間を見せている女子が多かったことも記憶している。

そうすると、噂も真実味を増してくるというもので鼻息を荒くしていた。

「そうですね……う〜ん、いきなり面食らうこともあるかも知れませんが、少し他の街より性に対しては大らかではありますね。ただ、無理強いなどはないので、苦手なことはしっかりと言えば、しつこく食い下がる人はあんまりいませんよ？」

「性に……大らか……そ、う、なんですか……」

華扇の説明に興奮はどんどん高まっていく。

それはネットの噂を後押しするようなものであったからだ。

非常に美人な教師がそれを言うのだから、半信半疑の気持ちもドンドン信じる方へと転がっていく。

「……っ（もしかして、彼女も、童貞卒業も出来る、かも？）」

等と、これからのことの興奮しながら、廊下を進んでいき、二人は一つの教室の前で止まった。

「ここが貴方の教室です。ああ、この校舎は特に女子が多いので、クラスも女子が大半ですけど、みんないい子たちですのですぐに打ち解けられると思いますよ。それと❤️」

「そうなんですか……………それと……？」

女子だらけと聞いて浮かれる気持ちと、上手く馴染めるかの不安を覚えていると、華扇は〇〇の手にそっと折りたたまれた小さな紙を握らせてきた。

いきなりのことに驚きながらも、彼女が促すので〇〇は紙を広げて見た。

そこには『NINE（ナリン）』と呼ばれる渋谷独自のメッセージアプリのIDと――。

『困ったことがあったらいつでも相談してね？ 渋谷市東区地区HAKUREIマンション301号室』

――なんて住所まで書かれていた。

そのことに驚いて華扇を見ると、彼女は可愛らしくウィンクをして、人差し指を自分の口に当てて「しー」と他言無用のジェスチャーをしてきた。

心臓のドキドキが止まらないまま、華扇が先に教室に入っていく。

「紹介したら入ってきて？」という言葉に緊張しながら頷いていく。

まさか、いきなり超美人な先生から連絡先に、住所まで教えられるなんて、過去の〇〇の人生、経験ではありえない事態だった。

モテたことなどない人生、それなのにこんなことがあって良いのかと、「もしかしてからかわれている？」という疑惑は捨てきれないまま、その紙を大事にポケットにしまうと、教室の中から華扇に呼ばれた。

「は、はいっ……！」

緊張から上ずった声を出してしまい、しかも、入る際に足をもつれさせるという情けない動きを見せながら教室に入ってみんなの前に立った。

そして挨拶をしようとして教室を見回して――。

「っ……！（本当に女の子ばかり……って、か……カワイイ子、多すぎない！？）」

――あまりにも美少女だらけ、まるでアイドルが制服を着てバラエティーかドラマでもやっているようなレベル。

むしろアイドル以上の美少女、美人の集まりに緊張が更に高まっていた。

何よりも渋谷は年間通して温暖な気候であることと、女性の平均体温が日本の平均よりも遥かに高いこともあってか制服の薄着度が半端ではない。

谷間を見せている娘もいれば、ワイシャツの下に黒のビキニのようなものを着ている娘もいるし、ハートのニプレスなんて娘だっている。

制服のセーラー服自体がかなり薄く透けやすい素材のようで、身体を見せつける為に着ているようなレベルだった。

そんなエロすぎる美少女たちが興味津々な顔で〇〇を見つめてくる。

彼は既に興奮してしまい、緊張を振りきって勃起した股間を見て、女子たちはヒソヒソと非常に嬉しそうに話しているような状態だった。

また、クラスの男子たちは穏やかそうで「男が増えたね」「ゲームとか好きかな?」「優しそうな人だね～」なんてまったりと話しているレベルであった。

〇〇は渋谷に引っ越してきて、親戚の家に住むようになって、叔母にあたる女性が非常に綺麗なのを知っていて、その娘、従妹にあたる女の子も美少女なのは知っていた。

だけど、それでも、ここまで美少女だらけなんてあり得るのか?と驚いてしまっていた。

面食らいつつも〇〇は、いつまでも棒立ちはまずいとして、簡単に挨拶をした。

ただの「〇〇です。引っ越してきたばかりですけど、よろしく願いしまふ」と、最後に囁んでしまったような普通の挨拶。

だというのに、クラスの女子は大きな拍手で迎えてくれていた。

それに興奮とは別に〇〇は「本当に良い人たちばかりなんだ……」と、緊張を少しだけ解いていった。

「それでは、〇〇くんは十六夜さんと紅さんの間の席に座ってください」

「あ……は、はい……」

挨拶を終え、まだ慣れない、緊張を残した顔で少年は言われた席に向かう。

周りから、特に女子からのしつこいくらいの視線を浴びて、誰も彼も改めて美人、美少女、外でならアイドルとして活動してても変ではない彼女たちに無意識に生唾を飲んでしまっていた。

そして、言われたように指示された席に座り、華扇が「十六夜さん」そう呼んだ生徒の方をまずは見て挨拶をしていく。

「よろしく、お願いします、えっと、十六夜、さん?」

「咲夜、で良いわ」

「え……?」

まだ慣れないし、女の子相手に話すことも慣れていないのでおどおどしている〇〇相手に、咲夜、そう名乗った銀髪の、非常に綺麗な顔をして女子生徒は名前を呼び捨てで良い、と宣言した。

その言葉に戸惑うのは〇〇だ。彼は今まで女性を呼び捨てで呼んだことなんてほとんどないのだから。

むしろ、女子との会話なんて小学校の頃以来ロクにしていない。

しかも、相手は息をのむほどなんて言葉が似あう美少女で、そんな相手を易々と呼び捨てになんて出来ない、そう思った。

「あ……咲夜さ 「咲夜」 ……咲夜」

せめて、『さん』を付けようとする彼の遠慮を正面から切って捨てた咲夜。

〇〇は本当に呼び捨てで良いのかなとモジモジしているようであり、咲夜の余りにも綺麗な美少女っぷりに緊張しているようだった。

アイドル、モデル、何であれトップに立てそうな美貌であり、加工された『外』のアイドルの写真よりも綺麗な生身という凄まじさに見とれてしまっていた。

その咲夜は少し頬を染めながら、綺麗な銀髪をかきあげると、〇〇の方を椅子ごと向いた。

「ね……〇〇って引っ越してきたって言うけど……『外』に彼女とか……いるの？」

「え……？ い、いや、いない、けど……（うお……凄い美人……しかも、え、え？ ブラ、してる？ え？ 乳首透けて、え？）」

咲夜はそのかなり大きな胸、サイズで言えばFカップはありそうなほどに大きな胸を揺らしながら話しかけていく。

セーラー服を着てはいるけれど、胸元が深めに開いていて谷間を見せる咲夜、その胸には明らかに乳首が浮いていてノーブラなのは見て明らかだった。

「……………っ（凄いつ、え、エロすぎない！？）」

ジロジロ見てはいけないと思いつつも、〇〇は視線を彼女のおっぱいに向けてしまっていく。

咲夜は少し動くだけで形の良い爆乳を揺らし、〇〇に彼女がいないと聞くとクールそうな美貌に嬉しそうな、可愛い笑みを浮かべていた。

「彼女……いないのね？ へええ……そうなの……❤️ へえええ……❤️」

「っ……………（美人で、巨乳で……こんなに綺麗な娘が本当にエロいの、かな、いや、ノーブラだけど！）」

その笑顔にドキドキしながら、ノーブラの乳首に視線がいきそうになるのを〇〇は必死にこらえていく。

初対面でおっぱいをジロジロ見る様な男は嫌われるだろうと思い、視線をそらしたくても、顔を見るとあまりの綺麗さに直視もできない。

視線を下げると大きなおっぱい、更に下げると健康的な足がミニ過ぎるミニスカートから見えていて――。

「……………！（よく見ると、これ、ガーターベルト！？）」

――彼女がガーターベルトをつけていることに気が付いた。

こんなセクシーな格好の学生がいても良いのかと混乱と興奮の中にいると更に反対側からも声をかけられた。

「もー、咲夜さん？ いきなり独り占めはダメですよ？」

「なんのことかしら？ 美鈴、言いがかりはやめて欲しいのだけど？」

「っ……！ うお……！」

声に反応して〇〇が振り向くと、そこにいたのは綺麗な赤い髪をしたこれまた驚くほど美人で巨乳の美少女だった。

咲夜と違ってカワイイ系美人という感じであり、快活な笑顔を見せる彼女もまたそのセーラー服の下はノーブラである様で乳首が透けていた。

タイプは違うけれどこれまた圧倒的なまでの美少女に〇〇は本当に息を吞んでしまうほどだった。

そしてその美鈴（メイリン）と呼ばれた彼女はしっかりと〇〇に視線を合わせて、可愛らしく片手を額に当てての敬礼をしてきた。

敬礼の動きだけで乳首の浮いたノーブラのおっぱい、ただでさえ大きな咲夜よりも更に大きそうなその胸が揺れていた。

ブラもしていないのに型崩れもないその胸に〇〇は何度目かもわからない生唾を飲んでしまっていた。

「初めまして〇〇くん❤️ 紅 美鈴（ホン メイリン）と申します❤️ よろしく願いますね❤️」

「あ……よ、よろしく、紅さ…… 「美鈴で良いですよ～❤️」 美鈴……」

呼び捨てにして欲しいという、咲夜と同じ要求に今度は素直に応える〇〇。

そして、二人はかなり椅子と机をくっつけてきて、授業中が始まってもし声をかけてきた。

その度に、あまりにも綺麗で可愛い二人にドキドキしっぱなしであり、ついついその谷間を見てしまう。

授業中、興奮に〇〇が消しゴムを落とすと二人は率先して拾ってくれるのだが、ただでさえ谷間が見えているのに、前かがみになると乳首が見えてしまっていた。

「う……あ（谷間もだけど、乳首、見えて……!）」

「はい、どうぞ❤️」

美鈴に拾って貰った消しゴムを受け取り、しっかり見えてしまった乳首と谷間に喉を鳴らして唾を飲んでいく。

そんなラッキースケベに放課後までに数十回も出くわしていた。

そして、二人だけではなくクラスの女子は休み時間なる度に集まってきて〇〇を囲む。
クラスだけではなく他のクラスからも色とりどりという様な美少女のオンパレード。
谷間を見せてくる女の子が多くて、嬉しそうに話しかけてくる美少女たちに、〇〇はその日だけでN I N Eを46人の美少女と交換した。
夢みたいな状況でありつつも常に興奮しっぱなしで疲れてしまうほどであった。
そして、授業は瞬く前に終わると放課後になった。

「ふ〜……（凄いとかだなあ、渋成って……みんなカワイイし、女の子とこんなに連絡先交換したの初めて……）」

興奮が収まらず、チラッとスマホを確認すれば既に何人の女の子たちからメッセージが入っていた。
ここなら可愛い彼女も出来るかも知れない、童貞の卒業も難しくないかも、なんてニヤニヤしてしまいつつも鞆を持つと――。

「〇〇さんっ❤️ セっかくなので学校の案内をさせて貰って良いですか〜？」

――明るい声をかけられて、その声に反応する前に背中に”ぽにゅん❤️”と大きくて柔らかいものが押し付けられた。

その大きくて柔らかいものの正体に理解が及ぶ前に、耳元で続けられる声に身体を震わせてしまう。

「お忙しかったら大丈夫ですけど……良ければ、〇〇さんにご案内させてもらいたいんですけど……❤️」

「っ、め、美鈴、っ……………（当たってるっ！ 凄く大きくて柔らかい、おっぱい、これ!?!）」

声をかけてきたのは美鈴。

背中におっぱいを押し付けるように抱き着いて耳に口を寄せて甘く囁いていく。

その囁きにゾクゾクと身体を震わせてしまう。

そのとき〇〇は、美鈴が少しだけ不安そうにしていることには気が付かなかった。

ただただおっぱいの感触と耳に当たる声の気持ち良さに夢中になっていくばかりだった。

そこに更に――。

「もちろん、嫌なら断ってくれても良いのよ？ でも、出来れば案内させて欲しいわ……❤️」

「咲夜……」

――銀髪美人の咲夜も近寄ってくる。

歩くたびにおっぱいを揺らしていき、ギュッと正面から抱き着くようにおっぱいを押し付けてきた。

二人の高めの体温、大きなおっぱい、そして二人のそれぞれタイプの違う良い匂いにクラクラしてし

まっていた。

こんな美少女から案内を申し出て来られて断る訳もなく〇〇は「よ、よろしくお願いします」と言った。

それに二人は嬉しそうに笑顔になり、咲夜はクールさを捨てたように可愛らしく小さく跳ねて「やった♥」と言った後に、ハッと我に返り恥ずかしそうに顔を赤らめていた。

〇〇は「こんな綺麗な二人に誘われたら断る訳ないのに……なんでこんなに嬉しそうなんだろう」と少し疑問に思いつつも、左右からそれぞれ腕を組まれて特大サイズの爆乳おっぱいを押し当てられたまま教室を連れ出された。

ちなみに、案内役を申し出ようとしていた女子は他にも1人ほどいて、咲夜たちに連れていかれる〇〇を名残惜しそうに見ていたという。

ついでに、担任の華扇もその役目を狙っていたようで、残念そうに溜息をついていた。

―――。

―――――。

「この学校は本当に広いから迷わないようにね？ 校門からバス出てるから校舎まで簡単だけど、自転車とかバイクで移動する人もいるわ」

「バイク?! そんなに広いんだ……」

「そうですよ～？ 高等部校舎だけで7個、中等部に初等部、大学も同じ敷地内ですからね」

左右から二人の美少女に腕を組まれての廊下を歩き、校舎の案内をされていく〇〇。

案内を聞きながらも、腕にあたるおっぱいの大きさ、柔らかさにドキドキしっぱなしであり、二人からの甘く良い香りに興奮は止まらない。

しかも、二人に腕を組まれているので勃起してしまっているチンポを隠すこともできない。

幸いにもまだ二人には気づかれてはいないようだが時間の問題だろう。

この学校、街の話を聞きながら、その特殊性に驚きつつも、どうしても左右の二人に意識は向いてしまっていた。

興奮しながら歩いていく中で、二人は〇〇に対して恋愛の質問をしだしていく。

「恋愛の経験とかってどんなものなのかしら？」

「……………彼女は、その、恥ずかしけど……………いたこと……………ない……………」

「「!!!!」」

〇〇が彼女いたことないと告げると、彼を挟むようにしている二人は目を見開いて、かつ目を合わせて咄嗟にお互い片手の親指を立てて、グッと突き出してあった。

同時に生唾を飲む二人。

目配せをしあって、二人は目を合わせて、咲夜が小さく頷くと声を震わせながら口を開いた。

「そ……それって……童貞………ってこと、かしら？」

期待を多量に含んだその質問。

咲夜の頬は赤く染まり、ギュッと強くおっぱいを押し付けていく。

反対側の美鈴も同じ状況で、ドキドキしているようだった。

その質問に〇〇は流石に照れつつも――。

「ま、まあ………はい……童貞、です」

――そうハッキリと答えた。

その答えに咲夜と美鈴は笑ったりバかにしたりすることもなくゴクリと音を立てて唾を飲み込んだ。

まるで、というか実際その通りに大好物が目の前に現れた事実。。

その童貞発言に近くを歩いていた女子生徒もピクッと足を止めて、「あ、あの……」なんて声をかけようとしたが、咲夜が一睨みで追い払っていく。

外ではどうあれ、この渋谷においては童貞というのは非常に希少価値の高いものであった。

童貞の男子とHをしてみたいという欲望を抱えた女子は非常に、非常に多いのである。

「ねえ……彼女、いなかったっていうけど……その、こっちで作る気はあるのかしら？」

「あ、そ、それ！ それ、聞きたいですっ♥ 〇〇さんってどんな女の子が好みなんですか？」

「え……ええ……っと……彼女は出来れば欲しい、けど……（好みって言われても……）」

頬を赤らめながら二人は身体をグッと寄せて大きすぎるおっぱいを押し付けていく。

その柔らかさに興奮しながら、彼女が欲しいことを告げるだけで二人は「ほんとに！？」「彼女に絶対必要な条件とかあります！？」と目をギラギラさせて質問を続ける。

その質問に〇〇は言葉に詰まってしまう。

興奮した二人のおっぱいが”むぎゅう♥”と押し付けられていくことに興奮が高まりすぎてしまったからだ。

そうすると、ズボンの前は完全に膨らんでいて、その下で勃起したチンポが待機しているのも丸わかりになってしまう。

それを隠したくもあるので、落ち着かせるように「お、おっぱい……当たってるから……離れて」というと、二人は慌てて身体を離していく。

更に――。

「ご、ごめんなさい……不愉快だったわよね？ あの、本当にごめんなさい……」

「申し訳ありませんっ……こんな無駄なお肉を押し付けちゃって……気持ち悪かったですよね？」

――咲夜と美鈴は、〇〇が申し訳なくなるほどに頭を下げてきた。

あまりのことに彼は「い、いやいや！ そんなことないから！ 本当に！」っと慌てて二人を慰めていく。

渋谷へと引っ越してきた〇〇は知らないけれど、女性が多く、そして美人が当たり前であり、かつ巨乳が多いこの街。

女性は性欲は高く、毎日でもエロいことをしたいと悶々としているのに相手がいらない、しかも『外』ではどうあれ、渋谷では平均バストはEカップであり、貧乳の方が求められる状況になっていた。

それ故に、もし『外』ならば街を歩くだけで告白されかねない超美人で爆乳の咲夜と美鈴は、男日照りとも言える状況に陥っていた。

クラスの男子は全員、中等部のロリ系美少女を彼女にしていたりして、美人でありながら彼氏がいらない女子は非常に多い。

そうすると、この街では『風俗』が発達しており、学生での利用も当たり前であり、女子たちはそれを利用していた。

お小遣いやバイト代をやり繰りして女性向けの風俗にいったセックスをするのが当然であった。

この二人もそうであり、美人でありながらも自己肯定感が低く、どうにか〇〇に気に入って欲しい、セックスをしたい、そう思っていた。

「おっぱいは、やっぱり小さい方が良い、わよね？ 私なんかじゃ……」

「あ、あの、やっぱり、バスト80超えてたら……恋愛対象にはなりませんか？ 97、なんですけど……」

さっきまでの嬉しそうな、興奮した顔が嘘の様にシュンとする二人。

美鈴は自分の大きなおっぱいの下に手を入れて、ズッシリしたそれを持ち上げて見せる。

その大きなおっぱいに〇〇はまた生唾を飲むと、しっかりと二人を見据えて顔を真っ赤にしながらも口を開いた。

「ふ、二人とも、しゃ、咲夜も、美鈴も凄く、凄く可愛いし……！ おっぱいの大きな女の子、大好き、だから！ だから、その、僕、童貞で……めちゃくちゃ可愛い二人にくっつかれると……緊張しちゃって、だけ、だから！」

「「！！！」」

緊張しながらも思いのたけを吐き出した。

その言葉に二人は――。

「！！(嘘、可愛いって言ってくれた？ めちゃくちゃ可愛いって！？ おっぱいも、好きって♥ 嘘、嘘っ♥)」

「！！(〇〇さんっ……わ、私なんかのことカワイイって♥ え、嘘、や、優しい、好きっ……♥ おっぱいも大きい方が好きって……♥)」

――感極まっていく。

さっきまでは『どうにかセックスしたい』という性欲メインだったけれど、それが一気に『好き♥』へとメーターが伸びていく。

性欲も一緒に高まっていくけれど、それと同じく恋愛感情も高まっていく二人。

言ったように美人だらけの街で、しかも貧乳、ロリ系が流行ってしまっている昨今、咲夜と美鈴みたいな巨乳美人はモテなかった。

やってくる年上の旅行者とか相手に媚びて抱いて貰うのが常の彼女たちに、正面から「可愛い」という言葉をぶつけた同年代の〇〇に二人は強すぎるほどの愛を向けていくことになる。

目にハートまで浮かべてしまった咲夜は、改めて〇〇に近寄っていきその時に、彼の股間の膨らみに気が付いた。

「あ……それ……♥」

「！？ あ！ ご、ごめんっ！ ふ、二人が可愛すぎて、そのっ……！」

咲夜が片手で口を抑えつつ指を刺すと、慌ててチンポジを直そうとしていく。

しかし、その手を咲夜はガシッと掴んだ。

「え……さく、や……？」

「私たちのせいで勃起しちゃったなら……♥ ふふふ♥ 彼女、いたことないなら……おしゃぶりも初めて、よね？」

また「可愛い」と褒められたことで、好感度カンストレベルまでに上がった二人。

褒められただけで、とことん相手のことを好きになってしまう最高レベルに都合の良いチョロマン、それがこの洪成の女子だった。

その中でも、咲夜と美鈴はその気質が強く、かつM寄りの性格をしているので〇〇相手に媚びる様な視線まで向けていく。

そして、胸だけじゃなく大きめのお尻をくねらせながら、さっきまで以上に良い匂いをさせながら迫る。

「すごっ……」

正面から近寄られると改めてその大きなおっぱい、その谷間を見せつけられてしまい生唾を飲んでいった。

そして、二人に押されるようにして廊下から離れていく。

抵抗もなく連れていかれたのは近くにあった空き教室。

誰もいないそこに連れ込まれて、明らかにさっきよりも体温あがっている美少女二人に密着されていく。

「私のこと……可愛いって言ってくれたお礼……❤️ させて？ もし、必要なら後でお金払うわ❤️」

「え……？ お、お金って、っ、咲夜っ、こんなところでっ……！」

さっきの発言に合わせて、咲夜がしゃがみ込んでズボンに手をかけてきた時点で何をされるのかは理解していた。

理解して期待しつつ生唾を飲んだ〇〇は、もちろん興味もあるし、こんな美少女相手にして貰えるなら願ったりかなったりではあるものの、学校ですることに抵抗はあった。

もちろん、学校で美少女とエッチなことをするのは男の夢ではあるものの、もし先生に見つかったりしたら停学？ 退学？ という不安は当然ある。

その不安を読み取る様に、咲夜と違い立ったままの美鈴は〇〇の耳元に口を寄せて囁く。

「だいじょぶですよ❤️ ほら……耳を澄ましてください？」

「え……？ ……………あ……」

美鈴の言葉に興奮と緊張をしつつも言われたように、耳を澄ましていくというか、ずっと二人に向けて続けていた意識を外へと向けていく。

そうすると――。

「……………これ、エッチ、してる声……？」

――微かにだけれども、どこかでエッチをしているような声と音が聞こえてきた。

教室の中にも聞こえてくるような声が、一人や二人ではなくそこら中から聞こえてきていた。

それは洪成ではこの程度のことは当たり前、日常だということだ。

それを理解して、〇〇は改めて、ネットの噂が真実だったことを理解していく。

そして、咲夜の手によりズボンが下ろされて、パンツまで下ろされると”ブルン！”と中々に立派なサイズのチンポが飛び出ていき咲夜の目の前に現れる。

「はああ……………♡ 立派ねえ…………♡ こんなのもってるなんて…………♡ しかも、優しくて素敵だなんて…………♡」

目の前に出てきたチンポに咲夜はうっとりした視線を向けていた。

まるで恋でもしているような熱い視線を向けていき、オスの臭いの強いチンポを前に目を潤ませていく。

美鈴もまた彼に寄り添うようにしながらチンポを見下ろして「うわあ…………♡ ご立派ですね♡」等と言って舌なめずりをしていた。

チンポを前に興奮の度合いを高めていく咲夜、クールで、見た目ではSにも見える彼女ではあるがその中身はMの服従体質のチョロマン♡

どこか気品のある顔立ちと雰囲気を持っているのに、それを台無しにするようながに股でしゃがみこんで、鼻をスンスン鳴らしていた。

「はあ♡ 素敵な匂い…………♡ くんくんっ♡ んんっ♡ 頭の奥まで…………♡ 痺れちゃうっ♡ はああ♡ んんんっ♡」

臭いを嗅ぎつつチンポをジッと見ていき、見下ろしてくる〇〇にハッキリと谷間を見せながら舌を少しだけ伸ばして引っ込めると――。

「オチンポ…………♡ 舐めさせて貰っても良い…………ですか？」

「…………！」

――敬語で上目遣いのままおねだりをしてきた。

美少女からのそんなおねだりをされるなんてこれまでの人生で経験していなかった〇〇は強く興奮していき、かつなんて答えるべきかも上手く言葉に出来なくて狼狽えてしまう。

その狼狽える姿を「可愛い♡」と呟いた美鈴は、自分も強く興奮しながらまた耳元に口を寄せていき――。

「舐めて良いって♡ おしゃぶりして良いって許可を与えてあげてくださいな♡」

「……っ！」

――そうアドバイスをしていた。

チンポをしゃぶりたくてたまらないメス犬気質の銀髪美少女に、『チンポをしゃぶる許可』を与えると

いう、本当にありえない興奮に緊張しながら、〇〇は一度唾を飲んでから命令出していった。

「な……舐めて……良いよっ……！」

「っ♡ あむっ♡ んんんっ♡ じゅるるるるっ♡♡」

そして、〇〇からの許可が出た瞬間に、待っていたというように咲夜はチンポにむしゃぶりついていく。

非常に綺麗な、モデル以上に整った顔を歪めるように大きく口を開けて、立派なサイズのチンポをしゃぶっていく。

「ふんっむっ♡ じゅるるっ♡ じゅっぷっ♡ じゅるるるう♡」

ツヤツヤプルプルの唇でチンポを挟み込んで、唾液多め、トロトロの天然ローションで満たされた口オナホでお迎えしていく。

「はっああ♡ すごっ……おっ……！ 咲夜っあ、こんな、ああああ♡」

「ちゅじゅるる♡ じゅぷぷっ♡ んんんっ♡ じゅるるるう♡」

片手はキンタマを優しく握ってコリコリと刺激をしながら、反対の手でチンポの根元を扱っていく。

それに合わせて、綺麗でプルプルした唇を締め付けるようにしてチンポをしゃぶる。

〇〇にとって初めての快感だった。

柔らかい口の気持ち良さと熱さ、オナニーとは違う、チンポ全体を包み込まれていく刺激と快感。

余りの気持ち良さに彼は腰をガクガクと震わせてしまっていた。

「ふっうぶ♡ じゅるるるうう♡ んんっ♡ 少しっ♡ オシッコ臭くて素敵♡ じゅちゅるる♡ じゅっぷじゅっぷじゅぷぷっ♡」

「あ〜♡ いいなあ、咲夜さん♡ 〇〇さんのオチンポあんなに頬張って……♡ それじゃあ、私はこっち♡」

「はああ♡ はああ……え？ あ……♡」

咲夜がその美人で綺麗で可愛い顔を台無しにするようながに股フェラをしているのを見て、羨ましそうに見つめていた美鈴は、〇〇の唇に狙いを定めると――。

「ん♡ ちゅ♡ んんんっ♡ ちゅうう♡ んっ♡」

「んんんっっ♡ (キスっ、は、初めてっ……キスっ！ 凄い良い匂いっ。こんな可愛い娘とファーストキスっ♡)」

——舌を差し込む本気のキスをしだしていた。

舌と舌とを絡めて、歯の一本一本を磨いていくような本気のキス♡

「れろお♡ んんんっ♡ んちゅう♡ れるれる♡」

美鈴は舐める為に特化したような長めの舌を挿入すると、その舌で〇〇の口の中を徹底的に舐めて味わって、快感を与えていく。

まだ、ロクにキスもしたことない、というかファーストキスの童貞男子相手に渋谷女子の本気のキスは刺激が強すぎるだろう。

気持ち良さに震えてしまい、彼はキスの虜になっていくようだった。

「じゅるるるっ……♡ ん♡ むう……！」

そのキスを見ていた咲夜は抗議するようにチンポをしゃぶりつつ、美鈴のスカートを引っ張っていた。抗議を受けながらも美鈴は深く、濃いキスをしていき、一度口を離すと——。

「ぷはあ♡ ふー……♡ もう、咲夜さんはオチンポとったんですからキスは私が貰っても良いじゃないですかー！ ね、〇〇さん♡ 私がファーストキスの相手じゃ嫌でしたか？」

「はっあ、はあ、い、いや、ぜんぜんっ、美鈴、みたいな、はあ♡ めちゃくちゃ可愛い女の子とキス出来て本当に嬉しい……よっ♡」

——咲夜相手に見せつけるように身体を寄せていき、可愛らしく頬にも「chu♡」とキスをしていく。

そんな行為にも〇〇は露骨に反応してしまっていて、しゃぶられているチンポをビクビクと震わせていた。

咲夜はどこか不満がありそうな顔をしつつも、また頭を揺らしてチンポをしゃぶっていく。

「じゅっぷじゅるるるるう♡ じゅるるるっ♡ じゅちゅるう♡」

私の方が気持ち良く出来るでしょう？とアピールするように上目遣いでフェラをしていき、唾液をそのあまりにも大きなおっぱいポタポタに垂らしていく。

ポタポタと唾液を垂らしていく咲夜に負けられないように美鈴はキスをしていき——。

「ちゅっ♡ ん♡ ぷはあ……♡ 大きいおっぱい、好きなら沢山揉んでくださいね……♡ 私のお

っぱい、〇〇さんの玩具にしてください♡」

「はあ、はあ……すごっ……おっきすぎて、指が……♡」

”むにゅう♡ ぽにゅうん♡”

——キスをしながら、〇〇の手首を掴んでセーラー服の中へと手を入れさせると、生で爆乳を揉ませていく。

自分のその100センチ間近の爆乳へと押し付けさせていき、興奮に鼻息を荒くしていた。

彼は、おっぱいにも興奮するし、キスにも興奮、もちろん咲夜のフェラにも気持ち良さと興奮を覚えていく。

今まで女のことは無縁の生活を送ってきたのに、いきなりこんなエロすぎる状況になって、心臓は強く早鐘を打っていた。

興奮に次ぐ興奮にチンポをビクつかせていき、あまりの気持ち良さに射精することすら忘れてしまっていた。

しかし、快感は直ぐに追いかけてきて——。

「っ！ あ……あああ♡ で、るっ……っ！」

「ん♡ ちゅじゅるる♡ じゅちゅる♡ じゅちゅ♡」

——そのまま咲夜の口の中に射精していく。

それに合わせて美鈴は、〇〇の口に深くキスをしていき、口内を舐めまわして刺激する。

チンポをしゃぶられて、濃ゆい精液を吐き出しながらの、口の中を愛撫するようなディープキスの合わせ技。

二人の愛のあるテクニックに上も下も気持ち良い状況になりながら”びゅるるるっ！”とかなり濃く、量も多い射精をしていった。

こしばらく引っ越しやら何やらでオナニーしていなかったこともあって——。

「ん♡ じゅる♡ ……♡ ん♡……♡ ゴクン♡ ふはあ……♡ ふふ、濃いね♡ 凄いわ……♡ っ、けぷ♡」

「はあ……はあ……はあ……は……」

——濃く、大量のザーメンだった。

それらを全て口で受け止めた咲夜は音を立てて飲み込んでいく。

うっとりしたような顔で精液の味を楽しんで、小さくゲップをしていくと「綺麗にするわね？」と言ってまだまだ元気なチンポへとお掃除フェラを始める。

さっきまでの射精をさせる為のフェラではなくて優しく丁寧に、どこかねちっこくチンポを舐め上げる。

「れろお……ん……♡ ちゅう♡ れる♡ ぺろぺろ♡」

「う……あ。気持ち良い……っ」

「ふふ♡ ありがとう♡ ちゅ♡ 私も♡ おしゃぶり出来て♡ すごく気持ち良いわ♡ ちゅじゅる♡ ん～♡」

尿道に残った精液も吸いだしていき、カリ首、裏筋なども丁寧に舐めていき、キンタマへのマッサージも念入り。

J Kがするには濃厚すぎるテクニックでのお掃除をフェラを味わいながら、〇〇は美鈴のおっぱいを無意識に揉んでいく。

揉まれている彼女は顔を真っ赤にして「私も……おしゃぶり……♡ んっ……♡ ああ♡」と可愛らしい声を漏らしつつ、何度も何度も〇〇にキスをせがんでいった。

二人の美少女相手に最高のサービスを受けるという、予想も出来なかった転校初日を満喫していく〇〇だが、まだまだ終わらない。

咲夜の時間をかけたお掃除フェラが終わると、チンポは既に完全に勃起。

さっき射精したことなんて忘れていたような絶倫っぷりを見せていた。

そしてそれを見れば、やりたい盛りの洪成女子が我慢できるはずもない。

「あ、あの、〇〇さんっ！ 良かったら……私たちの部屋に来ませんか？」

「そ、そのままじゃ、その、帰れないでしょう？ ら、乱暴なことは絶対しないわ！ むしろ、されたいっていうか……」

一回射精してもまだまだ元気なチンポにも惚れてしまった二人は下心満載の言葉をかけていく。

顔を真っ赤にして、セックスしたいという感情を隠す気もないお誘いをしている。

それに拒否する訳もなく〇〇は興奮しながら頷いた。

その答えに咲夜たちは非常に可愛い笑顔を見せて彼の腕を引っ張って歩き出した。

そして、三人が向かったのは学校の敷地内にある学生寮。

もはや大型のマンションのようなそこへと、学園バスを使って向かっていった。

そのバスの中でも、二人に左右から挟まれておっぱいを揉んだり、キスをされたりとハーレム気分を味わっていくことになる。

―――。

—————。

「これが学生寮……？ すっご……」

「ほら、こっちよ？」

いくつも立ち並ぶ大きなマンション——ではなく、学生寮に〇〇が驚いていると、そんな彼の腕を引っ張ってエレベーターへと向かっていった。

超マンモス学園故に、その広く大きな学生寮の廊下を歩いていく。

その途中でも女子生徒と出くわし、すれ違い、アプローチをされていくことでモテ男状態の〇〇。

二人は、鼻の下を伸ばす彼をこれ以上他の女に見つからないように急いで部屋へと連れ込んでいった。

「私たちはルームシェアしてるんですよ～❤️」

「一人暮らしもいるけど、二人、三人で住む生徒もいるわね」

「へええ……………（と、言うか……僕、女子の部屋に入るのも初めてなんだけど……）」

案内された部屋は普通に広くて、二人の性格なのか綺麗に掃除もされていた。

何よりも、二人の良い匂いが充満しているようで、その匂いだけでも勃起してしまうようだった。

〇〇がとりあえずどうしたものかと立っていると、二人はリビングスペースにある大きなソファーを組み替えて、ソファベッドへとしていく。

それはセックスするには十分な広さのベッドであり、その上にシーツを一枚被せればもう、『セックスの為の場所』へと変貌していく。

その作業をドキドキしながら見ている〇〇の前に準備を終えた二人はやってきた。

ベッドの準備をしながら何やら話し合ったりじゃんけんしていた咲夜たち。

最終的には美鈴がおっぱいを揺らしながらガッツポーズをして、咲夜が項垂れていた。

そして、少し不満そうな咲夜が美鈴の後ろの回ると、彼女のスカートをまくり上げた。

「……❤️ あの、エッチ、しませんか❤️ 我慢できなくなっちゃって……❤️」

「お口童貞は私が貰っちゃったから……この娘がどうしてもあなたの童貞が欲しいんだって……❤️ だめ？」

「っ！」

顔を真っ赤にして蕩けた顔でのおねだりをしてくる美鈴。

スカートをまくり上げると、そこには左右を紐で結んだ紐パン、赤の派手な色で、股間を隠す部分はハ

ート型になっているエロいものだった。

「ここに❤️ おちんぼ……❤️ 欲しいんですっ❤️」

その左右の紐をほどくと、はらりと床に下着は落ちていき、それで抑えられていたマン汁がとろりと垂れだしていった。

そんなおねだりを美少女からされて断る男などいない。

〇〇は震える手で服を脱いで、ソファベッドへと上がっていく。

美鈴は制服は着たまま、しかし、ノーパンノーブラの状態だ。

美少女と学校帰りにセックスなんて夢みたいな状態に生唾を飲んだ彼は「あ、あの、こ、コンドーム……」と緊張しつつ避妊具を探すのだが――。

「せっかくなんですし生でしませんか……？ 渋成だと生徒の産休制度もありますから……❤️ 妊娠、させてくれても大丈夫です……から……❤️ それに、〇〇さんの赤ちゃん……その、ほ、欲しいな……なんて❤️」

「あ、赤ちゃ……………っ！」

――美鈴は照れながら、生ハメのおねだり。

既に〇〇大好きになっている美鈴は妊娠をしたいとまで思ってしまった。

ゴロンとソファベッドに身体を倒すと、健康的にムチムチした足を広げておまんこをさらけ出す。

パイパンなのか毛の一本もなく、非常に綺麗なそこは既にマン汁が垂れるほど濡れていて、ヒクヒクとチンポを求めているようだった。

それを見ても〇〇は少しだけ躊躇っていく。

童貞卒業はしたい、こんな巨乳美少女相手に初エッチなんて一生自慢にできるというものだ。

だけど、いきなり生でのセックスなんて……。という真っ当な躊躇いをしていく。

だけど、どんどん濃くなるような美鈴の甘い、桃の蜜のような香りに脳がクラクラしていくと――。

「せ……責任はとれない、からね……？」

「……はい❤️ 責任不要のオナホだと思って……❤️ たっぷリエッチ、してください……❤️」

「っっ！」

――我慢しきれなくなり、チンポを震わせながら美鈴へと覆いかぶさる。

その男らしいというか雄らしい動きに咲夜も「まあ……❤️」と羨ましそうにしている、内心では「やっぱり童貞も欲しかった……」と悔やみつつ二人のセックスを見ながら、自分の胸を揉んでおまんこを弄

っていた。

「はあ……はあ……！　っ！」

濡れた穴へとチンポを押し当てた〇〇。

少し触れさせただけで、歓迎するように吸い付いてくる穴に息を荒くしていた。

美鈴はちゃんとチンポをお迎えできるようにと自分で腰の位置を変えて、おまんこでお出迎え。

そして呼吸を整えた〇〇は、制服を乱れされた美鈴のおまんこへとチンポを――。

”ずっふう♡”

「っ♡　ああ♡　ひああ♡　あ♡　っん♡　すご♡　オチンポ♡　んん♡
ふか♡　んん♡」

「っ！　うっあ……あっ……♡」

―――体重をかけて挿入していく。

初めてのセックス、制服美少女相手に生ハメエッチで童貞卒業。

ありえないほどの幸運と興奮に腰を震わせていく、そのままゆっくりとガクガク腰を揺らしてチンポを挿入していけば――。

「はああ♡　すごい、です♡　奥まで♡　あ♡　だめ♡　これ、気持ち良すぎて♡」

―――敏感すぎるチョロマンな美鈴は童貞チンポで感じまくってしまっていた。

咲夜も美鈴も処女ではない、ないけれども、洪成女子の多くは非常に敏感でM気質。

その気質が強い美鈴は挿入だけで大きく声をあげて、ピクピクと痙攣させるようにおまんこを締め付けていく。

もちろん、その気持ち良さに〇〇は呻くけれど、それ以上に彼女は感じていた。

咲夜はそんな美鈴の感じ方を見て、自分も早くとねだるようにオナニーをしていくのだった。

「美鈴っ……動く、よっ……（凄♡　これ、少し動くだけでゾリゾリとチンポ擦ってきてっ……）」

ヒダヒダ多めの名器まんこの持ち主。

そんなまんこに挿入した童貞チンポ。

〇〇は感じ過ぎてしまう恐怖すら覚えながら腰を振っていく。

まだまだ軟弱さの残る動きだけど、一回一回奥までしっかりチンポを押し込んでいた。

「はああ♡　ああ♡　んん♡　はああ♡　奥♡　奥す♡　このチンポ♡　女

の子ダメになっちゃいますっ♡ はああっ♡ ん♡ 好きっ♡ 好きっ♡」

敏感でクソ雑魚チョロマンな子宮を小突かれる度に美鈴は大きな声を上げていく。

一回ピストンされる度に、その爆乳を”たゆんたゆんっ♡”と揺らしていき、それを見た〇〇はセーラ一服をたくし上げて、おっぱいを露出させる。

「はあ……はあ……っ！」

「っ♡ おっぱい、虐められて♡ ふああああ♡ おまんこ、も、っ♡ おおおっ♡」

そのデカパイにむにゅむにゅ♡と、指を食い込ませて揉みながら腰を打ち付ける。

熱く、大量のマン汁を垂らす美鈴のおまんこからは白く濁った本気汁までトロトロ溢れていく。

「はああ♡ すごっ♡ おまんこもっ♡ おっぱいもっ♡ あああ♡ 好きっ♡ ふあああ♡ 気持ち良すぎてっ♡ あ、あひいいっ♡」

既に濡れ切って、感じまくりの美鈴のおまんこを刺激していくチンポ。

立派に反り返ったチンポの傘が、おまんこのヒダヒダを一枚一枚刺激する度に美鈴は美少女台無しな大きな喘ぎ声をあげて、マン汁を漏らしていた。

童貞のチンポで追い詰められるほどに感じまくっていく美鈴は更に――。

「はああ♡ んああ♡ んんっ♡ 気持ちいい♡ あっ♡ キスっ……♡ チューして、くださいっ♡ せ、切ないんですっ♡ お腹の奥がっ♡ キュンキュンしてっ♡ んんっ♡ お願いしますっ♡」

「っ、はあ、はっあ、わ、わかった……っちゅうっ♡」

――キスのおねだりをしていく。

子宮が「もっともっと♡」とおねだりしだしてしまう感覚に美鈴は甘い声を漏らしていく。

快楽としてチンポを欲しがる気持ちに合わせての、年頃乙女な恋心？

まだ性欲との折り合いはついていないようだけれど、本気でおねだりをしていた。

それに応えるように〇〇は身体を倒していき、彼女の柔らかい唇に、自分からキスをしていく。

「ちゅじゅる♡ んんっ♡ しゅきい♡ んんっ♡ ちゅっ♡」

「ふっう……あ……っあ、ふーっ、っ！」

美少女相手にディープキスをしながらの生ハメセックス。

脳みそ溶けそうになる快感を味わっていき、腰をカクカクと振っていく。

何度も何度も奥へとチンポを押し込んで、子宮を”どちゅどちゅっ♡”叩いて刺激♡

その快感に、美鈴は軽い絶頂を何度も繰り返して、おまんこを痙攣させていく。

「ちゅうう♡ ふはああ♡ んんっ♡ はああ……♡ 中に、出してください、ね……？」

「っ……それは……っ！」

〇〇のチンポが震え出したのを感じて射精の予兆を察した美鈴の中出しおねだり♡

真っ赤な顔で、蕩けた表情のままそんなおねだりをされれば、雄の本能が種付けをしろと囁いていく。

責任は取らなくて良いなんて言っていたけれど、いざとなるとまだ理性の残る〇〇は躊躇ってしまう。

だけど、その躊躇いを吹き飛ばす様に――。

「お願いします……♡ 妊娠、させてください……♡ 産みますから♡ 〇〇さんの遺伝子♡ 欲しいんです♡ 赤ちゃんください♡」

「っ！」

――美鈴は本気のおねだりをしていった。

彼の身体を抱きしめるように美鈴はその腕を、脚を〇〇の身体へと巻き付けていく。

強めの力だけど、本気で振りほどけば拒否できる程度の力だった。

その姿に、本気のおねだりに理性の鎖も振りきってしまった〇〇は、「この娘は本気で妊娠させてやる！」と危ない決意を固めて腰を振る。

深く、奥までチンポを押し込んで、美鈴の弱点のような子宮付近を念入りに刺激。

「本当にっ、本当に責任取らないっ、し、取れないからねっ……！」

「それで良いんですっ♡ 洪成だとシングルマザー、多いですからっ♡ あああっ♡ 奥っ♡ 好き♡ ふあああ♡ おまんこっ♡ おまんこ媚びちゃってるっ♡ あああ♡ 私をっ♡ ママに、してくださいっ♡」

シングルマザーになる宣言までしてしまっている美鈴のおまんこを激しくピストン。

チンポをしっかり締め付けていきながらも、硬さはまるでなくて見事な性処理用の穴へと何度も何度も出し入れしていく。

そして、緊張しつつも射精の瞬間。

本当に同級生を、めちゃくちゃ可愛い女の子を妊娠させてしまうのかという興奮のままに――。

「出すよっ！ このまま……っ！」

「はいっ♡ おまんこの奥に♡ ○○さんのっ♡ ザーメンお恵みくださいっ♡ 赤ちゃん孕ませ
てっ♡ ああああ♡♡ いくっ♡ イクっ♡ イクっ♡ イクうううっ♡」

「っ！！」

”びゅるるるっ！ びゅるっ！ びゅるるうっ！！”

——美鈴のおまんこの奥へとチンポを押し込んで、子宮に直接流し込むように射精していく。

二発目だというのに、まだまだ濃くてどろどろのザーメンを出していき、チンポを震わせながら彼女の身体へと体重をかけていった。

「んあああ♡ 奥っ♡ はああっ♡ んんっ♡」

体重をかけられて、深くチンポを受け入れた美鈴は甘い声を漏らしして、くびれた腰を揺らしていく。

中出しされて本気イキした美鈴は更に奥まで刺激されて、「だめっ♡ 深いイキ方しちゃいました♡」と痙攣したように身体を震わせていた。

童貞チンポにマジイキさせられたチョロマン姿を晒していった、○○も初めてのセックス、初めての中出しの興奮にしばらくは美鈴の上で動けないままだった。

そして、数分間繋がったままの彼はゆっくり身体を起こしていく。

チンポを引き抜く際にも美鈴は「ひあああ♡」とおまんこを擦られる快感に甘い声を漏らしていた。

そんな声が漏れるほどに勃起したままのチンポ、マン汁と本気汁、そしてザーメンが付いてテカテカ光るをそれを見せつけるようにしていく○○に咲夜はオナニーしっぱなしで興奮した顔を見せる。

「あ、あの、休憩入れなくて……大丈夫……かしら？」

「はあ……はあ………え？」

まだ初めてのセックスの余韻に浸っていて興奮の中にいる彼へと見せつけるように、スカートをたくし上げてパンツを見せるのはクールな美貌の持ち主たる咲夜。

ガーターベルトをつけた彼女はおまんこの部分がハートに穴の空いた、エロ下着を見せつけていく。

「もう、が、我慢できそうになくて……♡ おまんこ、ずっとキュンキュンしちゃってるの♡」

「はあ……はあ、すご……エロっ♡（下着のエロさも、セックスを我慢できないなんて咲夜みたいな美人が……！）」

息を荒げて、興奮を見せつけるようにおまんこを見せつける咲夜。

そこは美鈴よりも濃そうなマン汁がプラン❤️と垂れていて、非常にエロくあった。

ややがに股になっておまんこを見せつけた彼女もベッドに上がっていく。

息も絶え絶えで、溢れる精液を押し止めようとおまんこを抑える美鈴をどかすと、咲夜はベッドの上で四つん這いになり、お尻を高くあげてみせた。

「……❤️ あ、あの、い、犬みたいに、犯して欲しいのだけれど……ダメかしら？」

「っ……だ、だめじゃ……ない……❤️」

おっぱいもデカいがお尻もしっかりデカい❤️

そんな制服姿の美少女がお尻をフリフリしての、バックからのセックスおねだりに生唾を飲んでOKを出していく。

もう生で挿入することへの抵抗もなくなった〇〇は膝立ちになって、チンポの根元を掴んで狙いを定めていく。

「っ、入れるよ……？」

「❤️ お、お願い❤️ 思いっきり❤️ 奥まで……❤️ チンポっ❤️❤️」

ソファーベッドに顔を押し付けるようにして、頭よりもおまんこを高い位置に持っていき、「私はおまんこでモノを考えています」というアピールをする咲夜。

彼女の濡れ切ったそこ、おまんこを一応隠す下着に空いた穴へと〇〇はチンポを押し当てて――。

”ずぶうっ❤️”

「っ！（すごっ❤️ 美鈴とは違う、気持ち良さ……!）」

「っっっ❤️ ～～～っ❤️ ふにゃああああああああ❤️❤️❤️」

―――勢いをつけて挿入していく。

チンポが奥まで挿入された気持ち良さに、咲夜はシーツを掴んで大きな声で喘いでいく。

クールな美少女顔台無しなアへ顔で、ヨダレを垂らしてしまっていた。

「んああ❤️ 気持ちいっ❤️ あああ❤️ んんっ❤️ 我慢してたからっ❤️ ひ、響くっ❤️ イクっ❤️」

チンポを挿れられただけで、まずは挨拶の様に一回絶頂してしまう咲夜。

おまんこを痙攣させて、〇〇のチンポを歓迎するように震えわせていた。

そんな彼女のムッチリしたお尻に腰をぶつけるような勢いで挿入を繰り返す。

「うっあ……っ、すご、これっ……！」

「はああ♥ あああ♥ んんっ♥ すごいっ♥ このチンポっ♥ だめっ♥ ふにゃああ♥
イクううっ♥」

〇〇は美鈴とはまた違うまんこの気持ち良さに、首を反らして息を吐いていく。

息を吐きながらも腰を振り続けて、その快感に咲夜は甘い声を漏らしてお尻をくねらせていく。

おまんこの個人差を童貞卒業したその日に理解していく〇〇は、気持ち良さそうにくねるお尻に生唾を飲みつつ、少し迷って咲夜のくびれた腰を掴んだ。

もっと、さっきまでよりも激しく腰を振る為に、つまりはセックスの為に腰をロックした♥

「うわ……腰細っ……♥」

巨乳でお尻も大きく、だけど腰はほっそりと括れている咲夜。

美鈴もそれは同じだけど、めちゃくちゃスタイルが良いことを再認識しながら腰を振っていく。

バックからの挿入、〇〇には初めての体験であり、さっきの美鈴とはおまんこの形が違うこととは別に当たる角度が変わってくことで新鮮な快感を得ていく。

そして、その快感に腰を震わせて、咲夜の腰の細さに感動する彼以上に――。

「あっあ♥ あああ♥ おまんこっ♥ 深くっ♥ あああ♥ おちんぽ♥ このチンポすごっ
っ♥ ふああ♥ んんんっ♥ もっと、もっとおっ♥ 騎けてっ♥ おまんこ犬の咲夜をチンポで
騎けてっ♥」

――咲夜は感じまくり大きな声をあげていた。

その激しい喘ぎ声と自分を興奮させるような淫語の連打に少し面食らいつつも〇〇は腰を振っていく。

美鈴は「咲夜さんスイッチ入りまくりですね〜♥ 流石は超ドM♥」と笑っていた。

一見クールで、どこかSな雰囲気を見せる咲夜だけどその内面は美鈴以上のドMであり、自分を犬に例えておねだりするのが癖になっているほどだった。

特に気に入ったチンポには絶対服従を誓うタイプのマゾ犬であり、ヨダレを垂らして感じまくっていく。

「はふっ♥ はああ♥ おまんこっ♥ ああ♥ チンポ、このチンポすきいっ♥ ダメになりゅうっ
♥ ひいいん♥ 奥っ♥ コリコリっ♥ イクっ♥」

「はああはああ……っ！（あんなに綺麗な咲夜がこんな風にあえぐなんてっ……！）」

エロい下着をはかせたまま咲夜を犯していく。

そのお尻を叩くように腰を打ち付けていき、その度に彼女は大きな声で喘いでいく。

「気持ちいい♡ チンポっ♡ あああ♡ んんんっ♡ すごいっ♡ イクっ♡ イクっ♡」

小刻みに絶頂していき、チンポが出入りする度におまんこを痙攣させるように締め付けていき、その手でシーツをグッと掴んでいた。

チンポがおまんこを出入りするたびに甘い声を出して、マン汁を漏らしていく。

本気汁も当然漏らしているし、美鈴以上に感じて、汁を垂らしていきベッドシーツに染みを広げていた。

「もっとお♡ 奥っ♡ あああああん♡ すごっ♡ ふにゃあああ♡」

甘えた声を漏らしておねだりをする彼女に応えるように〇〇は奥へとチンポを押し込んでいく。

咲夜も奥の方が非常に弱いらしく、立派なチンポで子宮を押し上げられる快感に悶えていた。

”どちゅっ♡ ”

”こりっ♡”

奥が弱いことを見抜いた〇〇が、音がするほどに激しいセックスをしていき、咲夜を感じさせまくっていく。

〇〇は二回目のセックスながら『女をイカせる』楽しさを味わいだしてしまっていた。

二回も射精したことで余裕があるのと、二人があまりにも激しく感じまくってくれるのが楽しくて仕方がない様だった。

「ほらっ！ ほらあ……！ 犬ならっ……もっとちゃんと鳴きなよっ……！」

「っああ♡ はひいい♡ 鳴きまひゅううっ♡ わんっ♡ わんわんっ♡ チンポ好きいっわおおんっ♡」

ドMスイッチ入りまくりの咲夜は、美鈴が「うわあ♡」と言うほどにメス犬モード。

ピストンされながら命令されたら、もはや言いなり♡

甘えた声を漏らして、おまんこを締め付け自分からお尻を揺らして感じていく。

言われるがままに犬の鳴き真似までして、命令されることでも興奮する咲夜のおまんこの締め付けに限界が来た〇〇は、小刻みにチンポを出し入れしていく。

「っ！ ああっ……！ 射精、するよっ！ おまんこに、こっちの中出しするからねっ……！」

「はひいい♡ イクっ♡ ザーメンください♡ ご主人様のザーメン♡ 子犬産みますから♡」

パンパンと激しく音を立ててのピストンに腰を震わせて絶頂しまくる咲夜。
おまんこを””キュンキュン♡”と甘えるように締め付けてチンポを刺激する。
その締め付けが最後の一押しとなり――。

「っあ！」

「わふうう♡」

――奥までチンポを押し込んでいながら、〇〇は射精する。
奥の奥にチンポを押し当てて、弱点とも言える子宮をコリコリ刺激しつつ、精液を浴びせかけていく。

「はああああ♡ わふうう……っ♡ チンポのっ♡ はああ……♡」

「はああ……！ はああ……」

たった一日で二人に中出しなんて言うヤリチン行為。
さっきまで童貞だったとは思えないようなそれに彼自身現実味は無いようだった。
しかし、その快感は本物であって

「うっあ……！ 吸い付いてっ……♡」

「はああ♡ あああ♡ 中出しっ♡ あっつい……♡ イクっ♡ あああ♡ また、イクうっ♡」

少しも勢いの衰えないザーメンを吐き出していく〇〇。
咲夜の子宮をパンパンになるほどのザーメンを射精したら、流石に三発目、チンポは興奮していても腰やら足が限界の様で尻もちをつくように座り込んだ。
その勢いでおまんこからチンポを引き抜くと、咲夜は「ひあん♡」と甘い声を漏らしたのちに、「くうん……」と切なそうに鳴いていた。

「はあ……はああ……はああ……はあああ……………ふううう……」

いきなり二人の美少女との連続セックスに汗だくになりながら、やっと一息をついていく。
興奮はまだ収まらず、チンポは勃起していた。
ソファベッドに足を広げて座る彼のそのチンポへと二人の美少女は迫る。

「ちょっと……流石に……あ……」

「れろ……❤️ ん……❤️」

「お掃除、しまひゅ❤️ ちゅう❤️」

汗をかいて、制服を肌に張り付けさせてエロさを増した二人は、舌を伸ばしてチンポを舐めてお掃除していく。

「れろお❤️ んん❤️ すごい、まだ硬いのね……❤️ ちゅう❤️」

「本当に素敵ですう❤️ れるれるう❤️ ちゅっ❤️ もっと、もっとおまんこ❤️ してくださいっ❤️」

左右から伸ばされた舌が、まだまだ勃起を維持している絶倫よりのチンポを舐めていく。

二人のそれぞれ感触の違う舌による刺激に、〇〇はチンポをビクビク震わせていき、荒い息を吐いていた。

射精したばかりで敏感なそこを刺激されるのは強すぎる快感で、その気持ち良さに呻く様に声を漏らしていた。

「はあ……はああ……二人ともっ、うますぎっ……❤️」

そんな献身的で丁寧なお掃除フェラに〇〇は腰を震わせていく。

チンポのお掃除でありながらも、しっかりと気持ち良くさせるポイントを抑えていき、次のセックスへとつなげようとしていくようだった。

本当に夢みたいなこの状況。

あまりにも都合良くて、現実味がなさ過ぎるように感じてしまっていた。

全ては夢で、目が覚めたら自宅のベッドで寝ていたりしないかと思うほどだった。

だけど、夢ではなく現実であり、優しいお掃除フェラの快感を噛みしめていく。

そして、二人はチンポを舐めながら上目遣いに〇〇を見つめる。

「ね……ねえ……これからも、こんな風にエッチする関係に、なれない、かしら？」

「え……それって……？」

咲夜からの提案。

これからもエッチをする関係、それは恋人か、はたまた男の夢セフレというやつかと〇〇はチンポを震わせた。

ビュッとカウパーを飛ばした彼のそのやる気満々なチンポに応えるように美鈴がキンタマを舐めつつ

——。

「れろお♥ セックスフレンドってやつです♥」

「っ！」

——堂々とセフレ発言。

こんな美少女たちといつでもセックスできる関係なんて夢のようだと喜び勇む〇〇だけど、更にそこにまだドMスイッチの抜けていない咲夜が——。

「ご……ご主人様、でも良いわ……♥ 私たちを、肉便器のメス犬扱い……して？ なんでも……するわ♥ んんっ♥ わふう♥」

「ふふ、メス犬発言だけで咲夜さんイっちゃってますね♥ あ、もちろん、私も、ですからね？ ご主人様の言いなり肉便器になりますっ♥ いえ、ならしてください♥」

——肉便器宣言。〇〇にご主人様になってくれと頭まで下げる勢い。

それに美鈴も便乗していく。

媚びた顔でおねだりしてまで二人がなりたいのは〇〇のセフレで肉便器。

転校初日でアイドル以上にカワイイ巨乳美少女二人のご主人様になるなんて、エロ漫画そのものな展開に、彼は興奮してしまう。当然だろう。

「学校でもどこでも好きに私たちを使って良いからね？」

「週末は部屋にお泊りにきてくださいっ♥ どんなプレイでもOKですから♥」

二人からの誘惑。お掃除フェラされながらのそんな言葉に逆らうことが出来る男などいるはずもなく〇〇は頷いていく。

その頷きに反応して咲夜と美鈴は目を合わせて笑顔で

ご主人様と肉便器の契約が結ばれた瞬間だった。

目を輝かせる二人は——。

「それじゃあもう一回♥ 今度は私が動きますから寝てくださいね？」

「美鈴よりは小さいけど、94はあるんだからね？ 私のおっぱいも揉んで……ご主人様♥」

——まだまだセックスしたりないと鼻息を荒くしていった。

〇〇を仰向けに寝かせると、その上に美鈴はがに股騎乗位で乗っていく。

セーラー服をまくり上げて、おっぱいを露出したまま、生でチンポをしっかりと咥え込んでいく。
咲夜は〇〇の手を掴んでおっぱいを揉ませていき、自分の順番になるのを今か今かと待っている。

「んんう♡ あ♡ さっきイっちゃってるから……♡ 凄く敏感で……っ♡」

大きめのお尻を下ろしていき、美鈴はチンポを咥え込んでいく。

精液とマン汁で濡れた所でしっかりとチンポを包み込んでいき、お尻を下ろし切るとそれだけで腰をビクビク震わせて絶頂してしまっていた。

「ふふふ♡ 美鈴ったら〇〇のチンポに夢中ね？ 簡単にイっちゃって♡」

「んんっ♡ はああ……♡ そ、それは言いっこなし、ですよっ♡ んっ♡ このオチンポ、凄く良いところに当たって……っ♡」

マン汁を垂らして、息も絶え絶えな様子で美鈴は腰をくねらせていく。

お尻をピクピクと震わせて、気持ち良さの連続に何度もイってしまっているようだった。

そんな美鈴をからかいつつも咲夜は咲夜で興奮しながら、おっぱいを揉んでもらうことに甘い声をあげていた。

そのまま、我慢できなくなったのか、寝ている〇〇へとキスをしていく。

舌と舌とを絡めて――。

「ん♡ ちゅう……♡ れろ♡ んんっ♡ 私も、たっぷり気持ち良くして……♡ ご主人様あ……♡」

――甘えるように〇〇の身体を、胸板を撫でていく。

まだまだ終わりにする気はなさそうな二人、美鈴が腰を振りだして、部屋にエロい音が満ちていく。

そんな美少女二人相手のセックス、転校初日でこんなことになるなんて〇〇は驚きつつもニヤけてしまう。

ネットの噂は真実だったし、二人だけじゃなくて担任である華扇やクラスメイト、他にも何人もの美人相手にエロいことがし放題の予感を覚えていた。

転校してきたことを本当に喜びつつ、今までの人生が全部準備期間だったと思えるほどに楽しい毎日が始まる確信をしていくのだった。

――。

――。

「はああ……凄かったなあ……へへ……♡」

時刻は既に少し暗い時間。

たっぷりと咲夜と美鈴とのエッチを楽しんで楽しみ切って、シャワーを浴びて、そこでも二人の身体を堪能した〇〇は「泊っていけば？」という誘惑を振りきって岐路についていた。

すれ違う女子はみんな可愛いし、頻繁に声をかけられてその楽しさを味わいながら、ふとスマホが震えた。

取り出してみると、今まで交換した女子たちからのN I N Eのメッセージがあるが、一番上にはさっき交換した咲夜たちからのメッセージが表示されていた。

『画像を送信しました』というそれに「？」と首を捻りながらタップするとそこには——。

「うわ……❤️　すご……❤️」

——咲夜と美鈴のエロ写メが送られてきていた。



お互いに撮り合ったようで咲夜はエロい下着姿でデカパイにむぎゅっと寄せて『今度はパイズリ★させてね?』とのこと。

美鈴はおまんこを広げて見せてきて——。

『種付けありがとうございました♥』

——なんてアピールをしてきていた。

今すぐにも戻ってもう一回づつセックスをしたくなってくる気持ちをグッと堪えた〇〇は、明日はどんなことをしよう、もっとエロいことをしようと悶々としながら帰っていくのだった。

帰ったら帰ったで、〇〇の童貞を狙っていた美人な叔母と、美少女な従妹に誘惑されまくることになることは彼はまだ知らない。

渋谷の平和でエロい日常は終わることなくこの先も続いていく。

——。

—————。

「ふあああ……よく、寝たあ……」

朝、ベッドで〇〇は目を覚ます。

大きな欠伸をして、カーテン越しに差し込む日の光に目を細めていく。

渋谷に引っ越してきて数日、まだまだ完全に馴染んでいるとは言い難くあるけれど日々、嘘の様に舞い込むエロいイベントに疲れつつも存分に楽しんでいた。

目が覚めても彼の頭の中ではここ数日で体験した、美少女たちとのエロい行為の数々が流れていき口元がニヤニヤと緩んでしまっていた。

今、〇〇がいるのは渋谷に住む親戚の家、その一部屋を借りている。

叔母と従妹が住むそこ、二人とも非常に親切であり、彼を歓迎してくれていた。

親戚である二人が〇〇を歓迎する、それは自然な事でもあるのだけれどもここは渋谷であり——。

「さて、早く起きないと白蓮さんに悪いからっ…… ”むにゅ♥” っえ!？」

「んんっ……♥ ん？」

——渋谷での歓迎といえば、そういうことである。

起きようとベッドに手をついた彼の手が、布団とは異なる柔らかいものを、柔らかくて大きなものを掴んだ。

その感触に驚いて手を離し、触ったものがなんだったのかと慌てて確認すれば、そこにいたのは——

—。

「こ……ころ、ちゃん……？ あ、ああ……あの、ベッドに入るのはダメって、昨日も……い、言ったよね？」

「んう……？」

——非常に綺麗な顔をしていて、薄桃色の長い髪をした美少女にて、〇〇の従妹にあたる聖ころだった。

彼より年下で、美少女ながらも無表情な彼女は大きく欠伸をしながら身体を起こしていく。

さっき彼が触れたのは小柄ながら大きな彼女のおっぱいであった。

ころは大きめのシャツ一枚という非常にセクシーな格好であり、見ているだけで男を興奮させる色気を発していた。

それは〇〇にもろに効果が出ていて、彼は生唾を何度も飲み込み、無表情なころを見つめてしまう。

彼が引っ越してきてから、ころは毎晩の様にベッドに忍び込んでいたのであった。

それについて彼女の母である白蓮、おっとりした非常に巨乳の美人さんは「ころはお兄ちゃんが欲しかったんですよ♥」なんて言うだけで特に止める気もない。

故に、ころは当たり前のように〇〇の布団にもぐり込むのを日課にしていた。

「……………ん～？」

「う……………（やっぱり、めちゃくちゃ可愛いし、おっぱい……これ咲夜くらいある？）」

ころは〇〇をジッと見つめていき、見つめられた彼はその可愛すぎる顔と大きな胸、母の遺伝子を受け継ぎまくりな彼女を前に顔を真っ赤にしていた。

童貞を卒業して、美少女二人のご主人様となった彼ではあるけれど、まだまだ女の子に慣れた訳でもない。

可愛い女の子に近寄られるとドキドキしてしまうのだ。

そんな彼の内心を知ってか知らずかころはゆっくりと、〇〇へと身体を寄せていく。

「……………♥」

その眼にハートが浮かんでいるというのは錯覚ではないほどに、無表情ながらも目で訴えかけていた。

彼女の視線にいくらまだまだ経験値が足りない〇〇と言えど、何を求めているかは察していた。

しかし、女の子慣れしてないのと、何よりも「親戚に手を出すなんて！」というこの洪成では中々見られない真っ当な思考から彼は、ころのおっぱいに手を伸ばしたくなるのを我慢して慌ててベッドから逃げ出した。

「あ……………」

「ごめんっ、ごめん！　ころちゃんっ！」

少しだけ残念そうな顔をした彼女を置いて、〇〇は急いで部屋のドアを開けた。

興奮した気持ちを冷やすために顔でも洗おうとして、ドタバタと二階にある部屋から一階に降りていった。

そして、顔を洗ってリビングへと向かうとそこでは、ややウェーブがかった髪に、非常に大きく、美鈴よりもデカイおっぱいを搭載したおっとり美人の聖　白蓮が朝食の準備をしていた。

「あら、おはようございます♥　よく眠れましたか？」

「あ……は、はい、おかげさまで……」

〇〇に気が付いた白蓮は丁寧に挨拶をしていく。

その優しく丁寧な所作に彼はドキドキしてしまう。

白蓮は非常に美人であり、〇〇からしたら、ある意味憧れの存在でもあった、

美人な親戚のお姉さんというのが〇〇にとっての白蓮であり、そんな彼女と暮らせていることを再実感して、彼は緊張して興奮していた。

「……………（白蓮さん、本当に美人だなあ……）」

鼻の下を伸ばす勢いで興奮する〇〇、その彼のあることに気が付いた白蓮は優しい笑顔のまま近づいてきた。

いきなり超美人で、子供のころから憧れの、初恋の人でもある白蓮が近づいてくことに緊張しないわけもなく、〇〇はあわあわしていると彼女はそっと彼の耳元に口を寄せた。

「……♥　ふふ、おちんちん……おっきくなったままですよ？」

「っ！？　えあ……！」

優しい口から発せられたのは〇〇の股間、チンポが立っているという言葉。

それに彼が慌てるのを見てクスクスと笑うと白蓮はそっと片手を〇〇の股間に伸ばして、勃起しているチンポを撫でた。

「ひあっ！？　白蓮っ、さんっ！？」

その刺激に焦りつつ興奮していると彼女は更に――。

「……❤️ もし、おちんちんが我慢できなくなってきたら……❤️ ふふ、いつでも言ってくださいね？」

———そんなことを告げた。

まさかの申し出に、優しくありつつも色気のある表情に、〇〇はついつい生唾を飲んでしまった。

憧れの美人お姉さんからそんなことを言われるなんてと、緊張と興奮でなんて答えれば良いかと思っていると———。

「だめ……わたしが先……」

”ぼにゅううん❤️”

「っ！！？ こ、っ、ころ、ちゃん？」

———いつの間にか追ってきていたところが後ろから抱き着いて、彼の背中にその大きなおっぱいを押し付けてきた。

抱き着いて、おっぱいを押し当てながら片手を彼の股間に向けて、そっと撫でる。

その刺激にまたビクッと震えていると、白蓮も「あらあら、無理矢理はいけませんよ？」等と言いながら彼に迫ってくる。

前後から美人母娘にそれぞれ挟まれた彼は期待と興奮にチンポをビクビク震わせてカウパーを垂らしていく。

まだ目を覚まして数分、洪成の朝はどこまでも刺激が強い様だった。